

ぐんまで頑張る職業人の熱意をレポート!

柴崎龍吾の課外授業

Vol.38

うすい学園代表取締役の柴崎龍吾が街に飛び出して、元気に働く人にインタビュー。子どもたちのために、職業の多様性や働くことの意味を毎号レポートしていきます!



エフエム群馬にてインタビュー内容を放送中! 毎週月曜 ワイド番組「ユウガチャ!」内 16:41頃~



うすい学園代表取締役 柴崎龍吾
大学在学中に劇団を主宰し、卒業後は放送作家として活動。1975年に個人塾「横川学習塾」を開校し、以降、うすい学園を展開。子育てや教育に関する著書多数、ラジオ番組出演中。

今月の職業人

Koyane建設 代表取締役 ブゴーラ アダムさん



▲カナダ出身。来日当初は短期留学の予定だったが、弟子入りを機に移住。「どんなにうまく家を建てられるようになっても、日本にはさらに高い技術を持った人がいる。厳しい環境で、日々のやりがいを感じています」と話す
◀現在は、自身が代表を務めるKoyane建設と並行で、自然素材を使用した住まいを提案する団体、アトリエDEFのメンバーとしてもさまざまな活動を行う

日本建築の奥深さに憧れ 厳しい修行を乗り越え一人前の大工に

柴崎 今回は藤岡市内を拠点に群馬県全域で大工として活躍する、ズゴーラアダムさんにお話を伺います。アダムさんはカナダ出身とのことですが、来日したのはいつ頃でしょうか?

アダム 2003年です。大学時代に工業デザインを勉強しており、日本家屋の建築にはずっと興味がありました。社会人になった後、建築や設計を学ぶ一環で来日しました。

柴崎 具体的に、日本建築のどのような部分に引かれたのでしょうか?

アダム お寺や神社の外観はもとも好きでしたが、最も魅力を感じたのは民家の無駄のなさです。畳一枚、障子一枚から大きさが決まっている点や、木材のつな

ぎ目が他国と比べてきっちりしている点に感動しました。

柴崎 なるほど。確かに日本の家づくりは独特の伝統文化がありますね。では、大工になりたいと思うようになったきっかけは何でしょうか?

アダム 来日の目的は建築の勉強でしたので、日本で大工になるなんて想像もしていませんでした。しかし、学べば学べほど日本建築が好きになっていき、もっと知りたいと思ううちに、気付いたら大工の棟梁に弟子入りしていました。

柴崎 すごい熱意ですね。棟梁の元での修業はやはり厳しかったのでしょうか?

アダム そうですね。とてもやさしい方で、尊敬するところはたくさんあります

たが、とにかく建築に関しては厳しく、よく怒られました。けれど、弟子入りするときに言われた、「日本語もわからないのに無理じゃないか」という言葉が悔しくて、死に物狂いで技術を盗みましたね。大学の授業と違ってマニュアルがあるわけではないので、とにかく目で見て反復練習で覚えました。

柴崎 辛くて、修業から逃げたくなることもあったのではないですか?

アダム 私は辛く苦しくなるのが修業の第一歩だと考えています。棟梁と同じようにできず、悔しい思いをした経験は何度もありましたが、だからといって逃げたくなるようなことはありませんでした。独立させていただいた今でも、自分は修業中の身であると思っています。

柴崎 アダムさんは2010年に独立されていますね。ご自分が棟梁になって、変わった部分があれば教えてください。

アダム お客様目線で設計するようにになりました。修行中は、デザイナーの目線ですが、いざお客様に提案する立場に立つと、いかに住みやすいか、喜んでいただけるかという部分を第一に考えるようになりました。

柴崎 将来的に、弟子を取るつもりはありますか?

アダム 今は自分だけで精いっぱいです。しかし、いつかは取りたいと考えています。自分が棟梁から得た技術は、何百年も昔から日本で築かれてきた大切な文化です。自分の代で途切れさせないためにも、技術継承を考えています。

柴崎 日本に来て15年。一人前になってからも慢心せず、より高いレベルを求める姿勢には、まるで日本人のような武士道の心を感じました。それではまた次回!

